

王権の継受

——不改常典をめぐる——

村井康彦

はじめに

一 元明天皇即位の詔の分析

二 天智天皇の詔

三 不改常典の変容

四 讓位と皇太子制度

はじめに

この地球上には、過去幾多の王権が出現し、栄枯盛衰を繰り返すなかで、こんにちその殆んどが消滅した。もともと古代社会に発生
の要件をもつ王権がその後における歴史的条件の変化に伴ない、存

在の基盤を失ったのは当然の成り行きであろう。そのことは極東の日本に生れた王権『天皇制』においても例外であったとは思えない。しかし日本の王権『天皇制』は、原初的な王権とのつながりはともかく、八世紀に制度的な確立を見てから二十世紀のこんにちに至るまで、さまざまに変容をとげながらも長期にわたって存続し、それがいまなお国家的・社会的な原理として機能している。この事實は、日本の王権『天皇制』の検討が、それ自体の解明にとどまらず、王権の存続を可能にした日本の政治的・社会的な風土、ひろくいつて日本文化の構造や特質を明らかにするためにも不可欠の手續きであり、課題であることを教えている。近時盛んとなった各種日本王権『天皇制』論も、立場のちがいはあれ、その点では共通する認識に立っているといつてよいであろう。

ところで天皇制の存続に関して看過できないのが、古来権力の掌

握を志向した天皇はいずれも破滅したという歴史的事実である。その典型が後鳥羽天（上）皇であり、ことに後醍醐天皇であったことは、あらためて説明するまでもないであろう。承久の乱の背後に、宝剣なくして即位した後鳥羽天皇の、宝剣に象徴される武力への固執をみた丸谷才一^①氏や、後醍醐天皇を異形の王権としてとらえる網野善彦氏の論^②が、基本的に承認されるのは、日本の王権——天皇が、少なくともこの時期には、権力からはなれた存在であったという理解が、その前提にあるといつてよい。そして、この考え方を敷衍すれば、権力と権威の分化が日本の王権——天皇制を存続させる要件であったということになろう。もとより王権における権威と権力の分化は、日本の王権に限られるものではないが、しかし日本の場合、そのことが王権の存続の上で決定的な要因であったことはたしかである。とくに日本の王権がもつ権威と権力の分化を促したのが鎌倉幕府の成立にはじまる武家の登場であり、しかも看過できないのは、その結果、両者の間に相互補完の關係が生れたことである。この構造は基本的には鎌倉・室町時代はもとより、江戸時代を通じても変わらない。慈円は『愚管抄』のなかで、壇の浦の合戦で三種神器の一つ、宝剣が失われたことをもって、これは宝剣に代って武家が天皇の守りになったことだと指摘し、武家の登場を道理——歴史的必然とみたが、その後における歴史の展開は、慈円の指摘が間違っていないことが証明している。たとえば建長元年（一二四九）二月、

閑院内裏が焼亡した時、幕府は早速飛脚を立て、「関東（鎌倉幕府）の沙汰」として造進することを申し出、二年後にそれを果たしたという事実（『平戸記』）があるが、こうしたことが先例となってその後室町幕府や信長・秀吉といった天下統一統者、そして徳川幕府に至るまで、引き継がれる。信長の上洛以後における京都御所の造営の歴史を辿れば、そのことは明らかであろう。われわれは、天皇——公家の基盤を侵したのも武家なら、それを支えたのもまた武家であったという事実を確認しておく必要がある。比喩的にいえば日本の王権——天皇制を支えたのは源頼朝であり、それにはじまる武家であった。王権の否定者として登場したかに見える武家が、この国ではなぜ王権の擁護者となったのか、そのメカニズムを解明することなしには、日本の王権——天皇制はもとより、日本の社会の構造を明らかにすることはできないであろう。その意味で王権——天皇制を存続させた根源は中世に存しており、その検討が不可欠であるというのが、私の認識である。

しかし、そうした王権——天皇制の特徴が、中世になってにわかに現われたとも思えない。権威と権力の分化は、すでに古代の王権のなかに萌芽していたとみるべきである。それはいつか。少なくとも天智・天武天皇の時代ではないであろう。わが国古代の天皇は決して不執政ではない。権威と権力の保持者であった。貴族を議政官に任命し、かれらによる公卿合議制が天皇権を制約するのは、平安期

に降ってからのことである。

古代王権における権威と権力の分化の契機は、天皇が生存中に王権を譲り、太上天皇（上皇）になるという王権継受の慣習——譲位に求められる。もっともこの譲位とて、わが国独自のものというわけではないが、多くの民族にあつては、王権——王朝の交替をもたらしたのが、王の死か篡奪者の登場にあり、生存中に王権の継受を行なう方法が政治構造の核心にまでなることはなかった。

この譲位は、古い伝承の時代はともかく、本格的には持統十一年（六九七）、孫の珂瑠皇子を位に即け（文武天皇）、共治したという持統女帝にはじまる。しばしば中継ぎ天皇と称される女帝の時に譲位がはじまっているのは意味深い、この譲位の慣例化が、王権を天皇と上皇という二本立て、二重構造にした。その意味で私は、この譲位という政治的な知恵を見出した時、王権の日本的な構造の基礎がつくられ、中国の皇帝制と異なる天皇制が生れたといつても過言ではないと思う。すなわち天皇は国ツ神を奉祭し、宮廷行事の主宰者となるが、上皇はそうした建前の世界から逸脱し、法制に拘らず、恣意ともみられるような、本音の世界に振舞うことも許される。

院政期における造寺造仏、あるいは度々にはのぼる社寺参詣なども、天皇ではなく、すべて上皇の行なうところであつた。上皇には法的な制裁はもとより道義的な責任も追求されることがない。こうして権力のもつ攻撃的な性格や危険な要素が、上皇を通して発散・放電

された。そうした意味での王権の二重構造が、王権——天皇制をいわば柔構造にしたとみるわけである。

このようにみえてくると、権威と権力の分化と相互補完関係の源流としての譲位がはじまる前後の政治状況を検討する必要があるが、そのことに深く関わるのが、いわゆる「不改常典」である。天智天皇の定めたという不改常典とは、あらためて取上げるように、元明天皇の即位の詔にはじめて見えるもので、王権の継受に関わるなんらかの法と考えられるものであるが、私のみるところ持統女帝の譲位と密接な関係があつた。

この不改常典については、江戸時代の本居宣長以来、多くの研究者が取上げて来たにも拘らず、いまだ帰するところを知らない³。もつとも、細部の意見としてはあらかた出尽している感さえあるが、一長一短、部分的には同調できても、最終的にはどの説にも従えない、というのが実感である。しかも私にいわせれば、その一方で肝心の不改常典の語をふくむ元明天皇即位の詔が、これまた全体として検討されたということがない。これは不思議という他はない。

そこで以下本稿では、日本王権——天皇制の特質をさぐる作業の一環として、不改常典の検討を通じて王権の継受に関わる諸問題——譲位・嫡系相承・女帝・皇太子など——を考え、確立期における日本王権——天皇制の実態と特質を明らかにしたいと思う。

一 元明天皇即位の詔の分析

(1) 詔の構成

いわゆる「不改常典」とは、元明天皇が慶雲四年（七〇七）七月に即位した時の、宣命体で書かれた詔にはじめて登場する言葉である。詳しく書けば、「天地と共に長く、日月と共に遠く、改るまじき常の典と立て賜ひ、敷賜へる法」、それを略して「不改常典」と称しているわけで、以下本稿でもこの略称を用いることにする。

これより先き、故草壁皇子妃阿閉皇女（元明）は、同年六月二十四日、すなわち子の文武天皇が崩御した九日後、藤原宮の東楼に八省卿・五衛府督らを召して詔を下し、文武天皇の「遺詔」によって「万機を摂る」旨を表明したあと、七月十七日大極殿で即位した。問題の詔はその時のものであり、いわゆる不改常典論が、この元明天皇即位の詔のなかに所見する「不改常典」をめぐる議論であることはいちうまでもない。

しかしこれまでの議論は、不改常典に関わる部分を取上げるに急で、詔を全体として把握、そのなかで不改常典を理解するという視角を欠くものが少なくない。詔全体の文脈のなかで把握することなしに不改常典の意味を汲み取るてだてはないはずである。そこで本稿では、まず元明天皇即位の詔の全体的検討からはじめ、この言葉

をふくむ史料——いづれも詔であるが——のすべてに及びたいと思う。右の理由から、いささか長文に亘るが、最初に元明即位の詔の全文を掲げる。なお本文は一連の文章であるが、形式（いづれも「衆聞宣」で終る）と内容から四つの部分(1)~(4)に分けられるので、あとの論のためにもそのことを明示した。

(1)

天皇即位、於大極殿詔曰、現神八洲御宇倭根子天皇、詔旨勅命、親王諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞、宣、闕威、破藤原宮御宇、倭根子天皇丁酉八月、此食国天下之業乎、日並所知皇太子之嫡子、今御宇、豆留、天皇爾授賜而、並坐而、此天下乎治、賜比諸、賜、是者、闕威、破、近江大津宮御宇、大倭根子天皇、乃与天地共長、与日月共遠、不改常典止、立賜比敷賜、新法乎、受被賜坐而行、賜事止、衆受被賜、而、恐、美仕奉利、豆羅久止、命乎、衆聞宣。

(2)

如是仕奉侍爾、去年十一月、爾、威、加、我王、朕子天皇、乃詔、豆羅久、朕御身、坐、故、暇間得而御病、欲治、此乃天、豆日嗣之位者、大命、爾坐世、大坐坐而治、可賜止、議賜命乎、受被賜坐而、答曰、豆羅久、朕者不、堪止。

白而、受不^レ坐在^ハ間^ニ、遍多^ク久^ク日重^ニ而議^シ、賜^ハ倍^ニ婆^ヲ、勞^ハ美^ニ威^ヲ、今年^ハ六月^ニ十^ニ五^ニ日^ニ罷^シ、詔^ハ命^ニ者^ヲ受^ハ賜^ハ止^ニ白^ニ奈^ニ賀^ニ羅^ニ、此^ハ重^ニ位^ニ爾^ニ繼^ニ坐^ニ事^ヲ乎^ニ奈^ニ母^ニ、天^ノ地^ノ心^ヲ乎^ニ勞^ニ美^ニ重^ニ美^ニ、畏^ニ坐^ニ左^ニ久^ニ止^ニ詔^ニ命^ニ、衆^ノ聞^キ宣^ス、宣^ス。

(3) 故^ハ是^ヲ以^テ親^ニ王^ヲ始^ニ而^テ王^ノ臣^ノ百^ノ官^ノ人^ノ等^ノ乃^ニ、淨^ニ明^ニ心^ニ以^テ而^テ、弥^ニ務^ニ、弥^ニ結^ニ爾^ニ、阿^ノ奈^ノ奈^ノ比^ニ奉^ニ輔^ニ佐^ニ奉^ニ、年^ノ事^ノ爾^ノ依^ニ而^テ志^ニ、此^ハ食^ニ國^ノ天^ノ下^ノ之^ノ政^ノ事^ヲ者^ヲ、平^ニ長^ニ將^ニ在^ニ止^ニ奈^ニ母^ニ所^ノ念^ニ坐^ニ、又^ハ天^ノ下^ノ之^ノ共^ニ長^ニ遠^ニ不^レ改^ニ常^ニ典^ニ止^ニ立^ニ賜^ニ爾^ニ留^ニ食^ニ國^ノ法^ヲ母^ニ、傾^ニ事^ノ無^ニ久^ニ動^ニ事^ノ无^ニ久^ニ、渡^ニ將^ニ去^ニ止^ニ奈^ニ母^ニ所^ノ念^ニ行^ニ久^ニ止^ニ詔^ニ命^ニ、衆^ノ聞^キ宣^ス、宣^ス。

(4) 遠^ニ皇^ノ祖^ノ御^ニ世^ヲ始^ニ而^テ天^ノ皇^ノ御^ニ世^ヲ御^ニ世^ヲ、天^ノ豆^ノ日^ノ嗣^ニ止^ニ高^ニ御^ニ座^ニ爾^ニ坐^ニ而^テ、此^ハ食^ニ國^ノ天^ノ下^ノ之^ノ政^ノ事^ヲ者^ヲ、平^ニ長^ニ將^ニ在^ニ止^ニ奈^ニ母^ニ所^ノ念^ニ坐^ニ、又^ハ天^ノ下^ノ之^ノ共^ニ長^ニ遠^ニ不^レ改^ニ常^ニ典^ニ止^ニ立^ニ賜^ニ爾^ニ留^ニ食^ニ國^ノ法^ヲ母^ニ、傾^ニ事^ノ無^ニ久^ニ動^ニ事^ノ无^ニ久^ニ、渡^ニ將^ニ去^ニ止^ニ奈^ニ母^ニ所^ノ念^ニ行^ニ久^ニ止^ニ詔^ニ命^ニ、衆^ノ聞^キ宣^ス、宣^ス。

敕^ハ天^ノ下^ニ、自^ニ慶^ニ雲^ニ四^ニ年^ニ七^ニ月^ニ十^ニ七^ニ日^ニ昧^ニ爽^ニ、以^テ前^ニ大^ニ辟^ニ罪^ニ以下^ニ、罪^ニ無^ニ輕^ニ重^ニ、已^ニ發^ニ覺^ニ未^ニ發^ニ覺^ニ、威^ニ赦^ニ除^ニ之^ニ、其^ノ八^ノ虐^ノ之^ノ内^ニ已^ニ殺^ニ訖^ニ、及^ハ強^ニ盜^ニ竊^ニ盜^ニ、常^ニ赦^ニ不^レ免^ニ者^ヲ、並^ニ不^レ在^ニ赦^ニ例^ニ、前^ニ後^ニ流^ニ人^ノ非^ニ反^ニ逆^ニ緣^ニ坐^ニ、及^ハ移^ニ鄉^ニ者^ヲ、並^ニ宜^ニ放^ニ還^ニ亡^ニ命^ニ山^ノ沢^ニ、挾^ニ藏^ニ軍^ノ器^ヲ、百^ノ日^ニ不^レ首^ニ復^ニ、罪^ニ如^ニ初^ニ、給^ニ侍^ニ高^ニ年^ニ百^ノ歲^ニ以上^ニ、賜^ニ糒^ニ二^ノ斛^ニ、九^ノ十^ノ以^{上^ニ一^ノ斛^ニ五^ノ斗^ニ、八^ノ十^ノ以^{上^ニ一^ノ斛^ニ、八^ノ位^ノ以上^ニ、級^ノ別^ニ加^ニ二^ノ布^ニ一^ノ端^ニ、五}}

位^ノ以上^ニ不^レ在^ニ此^ノ例^ニ、僧^ノ尼^ノ准^ニ八^ノ位^ノ以上^ニ、各^ノ施^ニ糒^ニ布^ニ、賑^ニ恤^ニ鰥^ニ寡^ニ、悍^ニ獨^ニ不^レ能^ニ自^ニ存^ニ者^ヲ、人^ノ別^ニ賜^ニ糒^ニ一^ノ斛^ニ、京^ノ師^ノ、畿^ノ内^ノ、及^ハ大^ノ宰^ノ所^ノ部^ノ、諸^ノ國^ノ今^ノ年^ノ調^ニ、天^ノ下^ノ諸^ノ國^ノ今^ノ年^ノ田^ノ租^ノ復^ニ賜^ニ久^ニ止^ニ詔^ニ天^ノ皇^ノ大^ノ命^ノ乎^ニ、衆^ノ聞^キ宣^ス、宣^ス。

先^ニずそれぞれを要約すれば以下のごとくになる。

- (1) 持統から文武への譲位は「不改常典」に叶うものであったこと、
- (2) 元明への譲位は、文武の意志によるものであったこと、
- (3) 元明の即位は、「不改常典」と定められた「食国法」を伝えるためであること、
- (4) 即位に当り行なう大赦について、

である。このうち(4)は即位の詔にはつきものであるが、当面の問題には関わりがないので以下の論述からは除外しよう。

ここでもう少し詳しく詔の内容をみておく。

(1)は、「藤原宮御宇倭根子天皇」こと持統天皇は「食国天下之業」である皇位を、「日並所知皇太子」こと草壁皇子の嫡子である「今御宇留天皇」、すなわち文武天皇に授け、「並坐」して共治したが、これは「近江大津宮御宇大倭根子天皇」こと天智天皇が、「天下と共に長く、日月と共に遠く、改るまじき常の典と立て賜ひ敷き賜へる法」——いわゆる「不改常典」を受けて行なったことと理解して仕えて来た、というものの。素直に理解すれば、皇位継承におい

て、持統が文武に譲位し共治したのが不改常典によることを述べたもので、それ以外の解釈はまずありえない。

(2)は、去年十一月に私の子、文武が、自分は病弱なので暇を得て病を治療したい、ついでには皇位を私に譲りたいと申されたが、私はその任でないと辞退して来た。しかしそのことが度々に及んだので、今年六月十五日——じつは文武崩御の日であるが——詔命に従い、重任を受け継ぐことになった、というもので、元明即位の経緯を述べたもの。

(3)そこで、即位した元明は、親王王臣百官人らの協力によって天下の政事を永遠のものにしたい、また「不改常典と立賜へる食国法」も伝えたい、といい、即位に当たっての決意、施政方針を述べたもの。

(2) 二つの「不改常典」

さて、この詔には「不改常典」の語が二ヶ所——(1)および(3)に見するが、これを元明の即位を正当化するために持ち出された論拠——事実とみるか虚構とみるかの別はあっても——とする点では、ほとんどの説が一致する。⁽⁴⁾その理由は、元明の即位が異例中の異例であったという理解に基づいている。

元明の即位が異例であったというのは、さし当り、次の二点による。

(1)この皇位継承は子から母へと伝えられており、先例がない。
(2)従来の女帝は先帝の皇后であったが、元明は皇后(皇太子故事壁皇子の妃ではあったが)にはなっていない。

そこから多くの論者は、この異例の即位を実現するに当り、予想される反対を抑えるために不改常典を持ち出したのだとするわけである。即位の詔に所見する以上、その即位の論拠とされているとみるのは自然の理解であるが、果してそうであろうか。第一私には、諸説がいうように元明の即位がそれほど異例であったとは思えない。ちなみに異例の理由とされる女帝が先帝の皇后であったという点についていえば、前皇太子妃であった元明よりも、独身であった次の元正天皇の方がむしろ問題となるべきものであるが、元正即位の詔には「不改常典」は出てこない。つまり元明から元正への譲位については不改常典が論拠とはされていないのである。元正の即位も別に問題はなかったからである。

元明(元正をふくめてもよい)の即位は異例どころか、さして問題にもされていなかったことは、元明即位の詔を素直に読めば明らかで、多少の経緯はあったものの、文武天皇の「遺詔」に従って即位したと述べているにすぎない。それがなぜ異例中の異例とまでいわれるようになったのか。これには多分、女帝は前皇后であったとする通説⁽⁵⁾や皇位の継受は世代の新しい方向へ移るべきもの、とするような常識が影響しているにちがいない。この点については、あら

ためて言及するが、私は不改常典を、元明の即位のために持ち出された論理とする見方から、ひとまず解放することが、これ以後の論の展開のためにも不可欠であるといっておきたい。

元明の即位は異例ではないが、しかし即位の詔は、通常の詔に比して異例であり、特殊な部分が多くまかれていた。というのは、通常の即位の詔——といっても即位の詔が知られるのは文武の時（『日本紀』）からであるが——では、先きの(2)、すなわち前天皇との間の皇位の授受に関する部分からはじまるのが普通である。即位の詔である以上、それが当然のことであろう。

ところが元明の詔では、それ(2)の前に(1)の部分、すなわち皇位が持統から文武へ譲られ共治したことが述べられている。元明の即位（文武↓元明）というのに、なぜ前代の授受（持統↓文武）のことが引き合いに出されているのか。それが冒頭に置かれているだけに相応の理由があったとしなければならぬであろう。すでに予感されるように、この辺りに、この詔のもつ問題点、謎がひめられているといえそうである。

(3) 即位の年齢

これを解く鍵は、(3)の部分に所見するもう一つの「不改常典」にある。

もつとも(3)は元明の施政方針を述べた部分であり、即位の詔（『統

日本紀』文武元年八月十七日条）としては事新しい内容ではない。

文武即位の詔では「天皇朝廷の敷きたまひ行なひたまへる国法」（國を治める法）とみえる部分に当るもので、それがここでは「食国法」とあり、のちの時代には単に「国法」「法」で通用するようになる。ところが元明即位詔で留意されるのは、その「食国法」が「不改常典」として立てられたものであり、それを永く伝えて行くのが自分の責務であるとしていることにある。つまりここでは、一般には抽象的、観念的な内容のものであったと推定される食国法、国法に、「不改常典」としての意味づけがなされているわけで、これは「不改常典」としての食国法」の遵守が元明の役割、すなわち即位の目的であること、したがってそれを表明することに、元明即位の詔の意図するところがあったことを思わせる。しかしその真意は、ここではなお明らかではない。

この詔の真意は、靈龜元年（七一五）九月二日、元明が氷高内親王（元正）へ譲位するに際して下した詔——譲位の詔で果然明らかとなる。すなわち元明はこの日公卿百寮に対して詔を下し、そのなかで、

以ニ此神器ニ欲レ譲ニ皇太子（首皇子）ニ而年齒幼稚、未レ離ニ深宮ニ庶務多端、一日万機、

と述べ、氷高への譲位の目的が、じつは皇太子首皇子への皇位継授にあったことを表明しているからである。元明譲位——元正即位がそ

うであるならば、おのずから元明自身の即位も、首皇子への皇位継承のためであったということになる。

ところが、すでに見て来たように、元明即位の詔には、そのような気配すらない。この譲位の詔の明快さに比して、即位の詔の表現はじつに曖昧といわねばならない。首皇子への皇位継承を、何故そうまでしてカモフラージュしなければならなかったのであろうか。

それは、首皇子への皇位継承には幾多の困難な条件があり、その時点で即位できるという確証はどこにもなかったからである。その理由の第一は、首皇子が（立太子するにも即位するにも）幼少すぎたことであり、第二は、父文武が在世（位）中に首皇子を立太子することなく没した（七〇七年）こと、である。あまつさえ新田部・舍人親王など、天武の諸皇子がなお存在していたとすれば、首皇子の立場はむしろ不利でさえあった。ただひとつ、首皇子が他の皇子に越えるものがあるとすれば、文武の嫡子という点だけであったといつてよいであろう。

このうち年齢の問題については、まず立太子の場合、これまでの慣習では十歳未満で立太子した例は殆んどなかった。じじつ元明の即位当時、七歳であった首皇子が立太子したのは、それから七年後、十四歳になってからである。ところがその翌年、首皇子（十五歳）の即位は見送られ、叔母の元正天皇が元明より譲られて即位する。先きにあげた元明譲位の詔にあるように、これも皇太子首皇子の「年齒幼稚」によるものである。

つぎに天皇の即位年齢については、奈良朝時代以前の天皇について一覽表を掲げたが、文武以前（弘文については後述）では、武烈が十歳、安寧が二十九歳で即位しているのを除いて、すべて三十歳以上である（平均年齢四十七歳）。これらのうち問題のある応神以前を除いても、即位年齢が三十歳以上であったというのは、これが不文律として存在していたことを思わせるに十分である。天皇の年齢は即位の要件であったとみなければならない。これは大王・天皇が諸豪族を統括して執政する以上、一定の年齢に達していることが

神武	(15歳で立太子)	即位(52)
綏	靖	即位(52)
安	寧	即位(29)
懿	德	即位(44)
孝	昭	即位(32)
孝	安	即位(36)
孝	靈	即位(53)
孝	元	即位(60)
開	化	即位(51)
崇	神	即位(52)
垂	仁	即位(41)
景	行	即位(84)
成	務	即位(48)
仲	哀	即位(84)
応	神	即位(71)
仁	德	即位(57)
履	中	即位(82)
反	正	即位(71)
允	恭	即位(71)
安	康	即位(53)
雄	略	即位(39)
清	寧	即位(37)
顕	宗	即位(36)
仁	賢	即位(40)
武	烈	即位(10)
継	体	即位(58)
安	閑	即位(66)
宣	化	即位(69)
欽	明	即位(31)
敏	達	即位(35)
用	明	即位(46)
崇	峻	即位(45)
推	古	即位(39)
舒	明	即位(37)
皇	極	即位(49)*
孝	德	即位(50)
齊	明	重祚(62)**
天	智	即位(43)
弘	文	即位(23)
天	武	即位(44)
持	統	即位(46)
文	武	即位(15)
元	明	即位(47)
元	正	即位(36)
聖	武	即位(24)
孝	謙	即位(32)*
淳	仁	即位(26)
称	德	重祚(47)**
光	仁	即位(62)

称制

『日本書紀』『続日本紀』による。()内は即位時の年齢。

不可欠の条件だったからである。ところが従来の不改常典論においては、元明・元正の言葉のなかに首皇子の「年齒幼稚」とか「美麻斯親王乃齡（聖武）乃弱（聖武）爾、荷重波不堪（聖武）所念坐」と書かれているにもかかわらず、そのことに誰一人として言及していないのは不思議という他はない。そしてこれもまた不改常典論を迷路に追いやる一因になっている。

(4) 文武天皇の即位と不改常典

さて首皇子（聖武）の即位に年齢のことがこれほどまで関係したとなれば、遡って、十五歳で即位した文武天皇の場合こそ、異例中の異例であったといわねばならないし、その文武（珂瑠皇子）の若年即位が実現した事情を検討する必要があるだろう。

珂瑠皇子の即位も無条件で実現したのではなかった。それどころか極めて困難な状況にあった。

だいたい珂瑠皇子は天武の嫡孫とはいえず、父草壁皇子は、皇太子にはなったものの、皇位にはつかなかったし、すでに亡くなっている（六八九年）。しかも珂瑠皇子の周辺には、高市皇子をはじめ、皇位継承者の資格を有する年長の刑部や穗積・舍人親王など数多くの天武諸皇子がいた。かれらの次の世代に属する珂瑠皇子に有利な条件などほとんどなかったというのが実情である。かつて、大友皇子は天智の嫡子とはいいがたかったが、天智朝では最年長者であつ

たとみられる。しかし珂瑠皇子は、おそらく最年少であったのではなからうか。『懷風藻』葛野王伝に収める、高市皇子が没した（六九六年）あと、持統が日嗣の決定を王公卿士に審議させたところ、「時に群臣、各々私好をはさみ、衆議紛紜」であったという話は有名であるが、これなども、珂瑠皇子が決して卓越した存在ではなかったことを物語るものであろう。もともとこのあと一転して珂瑠皇子が浮上するのであるが、それについてはのちにふれよう。

こうした条件の下で、持統はどのように対処したのであろうか。

その一は、珂瑠皇子をとりあえず皇太子に立て（六九七年）、皇位継承者としての資格と地位の確立をはかったことである。これには、草壁皇子が二十歳で皇太子に立てられながら（六八一年）、五年後、父天武の死に当たっても即位のことなく、母が称制、皇太子のまま八年後に没したという苦い事実が教訓となったはずである。すなわち、(i)草壁皇子は即位はしなかったが、皇太子であり、皇位継承者であったことを強調する一方、(ii)珂瑠皇子も草壁皇子と同様皇太子に立て、その上で、皇太子に皇位継承者としての地位や資格を法的に認める方向で、皇太子制度の整備をはかること、であった。後者については最終章であらためて論ずるが、この時期が皇太子制度の一面期となっていることに留意しておきたい。

このことに関連して、元明即位の詔に珂瑠皇子が草壁皇子の嫡子であることを強調した点についてふれておきたい。元明即位の詔の

(1)に、珂瑠皇子を「日並所知皇太子（草壁）之嫡子」と表記されているのがそれである。皇位繼承を兄弟間よりも父子間（直系）に、直系のなかでは嫡子に、というのが中国的な觀念・制度であり、それがまた自然の情愛というものでもあったろうが、日本では必ずしも社会通念となっていたわけではないし、制度化もされていなかった。それがこの場面でもち出されたのは、あとに述べるように、首皇子の即位を実現するため嫡系相承を強調する必要から、珂瑠が草壁の嫡子であることを、その先例に仕立てたという性格がつよく、持統女帝の文武への讓位において、必ずしも決定的な条件とされたわけではない。

もっとも、珂瑠への皇位繼承については、やはり先の『懷風藻』葛野王伝に収めるエピソードが重要である。すなわち議論が紛糾して定まらなかった時、葛野王がこういったというのである。

我國家爲_レ法也、神代以來、子孫相承、以襲_二天位_一、若兄弟相及、則亂從_レ此興、仰論_二天心_一、誰能敢測、然以_二人事_一推_レ之、聖嗣自然定矣、此外誰敢問然乎。

と。天位は子孫相承さるべきで、兄弟相承は乱のおこる基である、だとすれば皇嗣は決っているようなものだ、といって、暗に珂瑠皇子を推したというもの。ここにいう子孫相承とは必ずしも嫡子相承とは限らないが、天武―持統―草壁―珂瑠という嫡系關係が重視されたことを示すものであろう。それが神代以来の慣わしというのも

正しくないし、そのあと発言しようとして葛野王に制止された弓削皇子のように、異論をもつものもいたのだが、結局は珂瑠皇子の立太子が定められたというのである。

この逸話は多分史実であろう。しかも葛野王の発言に重みがあるのは、この葛野王こそ、かの大友皇子の嫡子であったことにある。それが自発的なものか否かはともかく、持統の意を汲んでの発言であったとみてよいであろう。かつては敵対者であった立場の人物によるこの保証は、二重の意味で効力をもったにちがいない。

その二が、かくして立太子の半年後、年少であるという不利を打開するために、みずからは「讓位」したあと、珂瑠皇子（文武）と「共治」するという形をとることで、群臣の合意を取りつけたことである。いかに草壁皇子の嫡子であり、皇太子であっても、年少（十五歳）であるという障害を越えるためには、これを後見しつつ「共治」するという形以外には考えられなかったと思う。さもなければ、今後なお十余年を待たなければならない。それは立太子しながら八年後に没した草壁皇子の二の舞となるおそれが多分にあったし、なによりも、すでに五十三歳となっていた持統に時間的な余裕がなかった（讓位後五年後に没）。そこから考え出されたのが、讓位して年少天皇を後見（つまり共治）するという体制であった。それはこの時期考えうる唯一の手段ではなかったろうか。こうして持統女帝の時、はじめて讓位による王權繼承の方式が案出されたので

ある。文武の即位詔には、こうした事情は一切述べられてはおらず、不改常典に従ったとも記されないが、元明即位詔の(1)にみたように、天智の定めた不改常典が拠とされたとみてよいであろう。それに就いてはあらためてふれる。

さて、以上論じ来たつて明らかとなることは、皇位継承における文武（珂瑠皇子）と聖武（首皇子）の置かれた立場・状況の類似性であり、少異を捨象すれば両者はほとんど酷似しているといつてよい。この対応関係に気づくならば、元明の即位の詔には明示されなかったものの、元正への譲位の詔ではじめて姿をみせた首皇子の皇位継承——それに向けて元明・元正の即位があったこと、また首皇子の即位の論拠として持ち出された(3)の不改常典の先例が、(1)の不改常典による伝統から文武への皇位継承であったことの意味もおのずから明らかとなる。元明即位の詔に、一見無関係とも思えるこの(1)の事実、すなわち伝統から文武への継承のことが書かれた理由である。したがって元明の詔に不改常典の語が二度(3)と(1)出てくるが、この両者は密接に対応し合っているのである。その意味で元明即位の詔は、曖昧なように見えて、じつは緊密な論理構成をもつ恐るべき政治的文章であったといつても過言ではない。

その元明即位の詔に所見する不改常典については、引続きその実体を追究しなければならない。

二 天智天皇の詔

——原不改常典

天智天皇の定めたという「不改常典」とはなんであったのか。実体的なものか、それとも天智の名を借りただけのものだったのか。結論を先きに言えば北山茂夫氏や長山泰孝氏の指摘した天智天皇の詔（ただし両氏の説は微妙に異なる）、すなわち天智が危篤に陥った時、天智の詔を奉り、大友皇子と近江朝の五大官が誓盟を交わしたという、その詔のことであると考える。したがって私は不改常典を、少なくとも天智に仮託した実体的なものという説は採らない。問題の詔が登場するのは、壬申の乱の前史として周知の事実であるが、大海人皇子が皇太弟の地位を捨てて出家し、近江を離れて吉野へ入ってから約一ヶ月後、天智十年（六七二）十一月のことである（『日本書紀』同月二十三日条）。

大友皇子、在_ニ於内裏西殿織仏像前、左大臣蘇我赤兄臣・右大臣中臣金連・蘇我果安臣・巨勢人臣・紀大人臣侍焉。大友皇子、手執_ニ香炉、先起誓盟曰、六人同心、奉_ニ天、皇、詔。若有_レ違者、必被_ニ天罰、云々。於_レ是、左大臣蘇我赤兄臣等、手執_ニ香炉、隨_ニ次而起。泣血誓盟曰、臣等五人、隨_ニ於殿下、奉_ニ天、皇、詔、若有_レ違者、四天王打。天神地祇、亦復誅罰。卅_ニ三天、証_ニ知此事、子孫当絶、家門必亡、云々。

すなわち内裏西殿の織仏像の前で、まず大友皇子が、自分たち六人は心を一つにして「天皇の詔」を遵守することを誓い、ついで五大官も、「殿下」―大友皇子に随って「天皇の詔」に違約しないことを誓い合ったというものである。六日後の二十九日条には「五臣奉大友皇子、盟天皇前」とあり、五大官が大友皇子を奉じ、天智の前で誓盟している。「天皇の詔」の内容は詳らかにしないが、少なくとも成文化され、体系化された法といったものではなく、天智天皇の命令として五大官たちに与えられた口勅であり、その内容も、大友皇子を推戴し、これを補佐するように、といったたぐいのものであったことはまず間違いない。後世、瀕死の床にあった豊臣秀吉が、五大老に嫡男秀頼の将来をたのんだ、伏見城でのシーンとさして異なるものではなかったろう。違約した場合、「天罰を被らん」(大友皇子の場合)といい、「四天王や天神地祇の罰をうけ、子孫絶え家滅ぶであろう」(五大官の場合)といった文言が、その切実さをうかがわせる。翌二十四日、近江宮が焼けた(『日本書紀』)というのも、折が折だけにたんなる失火とは思えない。

それはともかく、こうした天智天皇の措置が、皇太弟大海人皇子をしりぞけ、大友皇子を皇儲にすえるための苦肉の策であったことはいうまでもない。これまでこの件に関しては、大友皇子が伊賀采女宅子という卑母の所生であることが障害であった、というふうに理解されてきた。しかしそれだけが問題であったのではない。大友

皇子の皇位継承には、もっと大きな障害があったからである。

それは大友が当時なお二十三歳でしかなかったという年齢の問題である。即位の年齢については以前掲げた一覽表からもわかるように、当時の慣例からすれば、三十歳でもなお年少と考えられていた。その点、大友を皇位に即けるためには、なお十年の歳月が必要ということになる。天智が苦慮したのはまさにその点であり、そのためにとられた緊急措置が、五大官による年少天皇の後見―共治体制の実現というものではなかったろうか。蘇我氏が二人、その他中臣・巨勢・紀氏といった五大官の顔ぶれは、天智の旧豪族との妥協を感じさせるが、大海人皇子を退けた以上、かれらの合意を得て共治体制を確立する以外に有効な手だてはなかったろうし、逆に共治という妥協こそが、年少天皇―大友皇子の即位を実現するための唯一の道であったと思われる。大友自身を含め、五大官に執拗なまで誓盟を求めているところに、事態の深刻さが示されている。

ちなみに壬申の乱のさ中、大海人皇子は、当時、十九歳の男、高市皇子に対して、「其近江朝、左右大臣、及智謀群臣、共定議。今朕無^ヒ与^ル計^ス事者^{ナリ}。唯有^ニ幼少孺^ニ子耳。奈之何^{ナリ}」(『日本書紀』天武元年六月二十七日条)と語ったというが、この言葉にも近江朝における五大官ら重臣の役割が示されているようで興味深い。むしろこれは高市皇子の士気を昂めるための言葉で、多少の誇張はあるにせよ、大友皇子(即位して弘文天皇)を中心とする共治体制がとられ

ていたことは事実とみて間違いないであろう。

これがいうところの天智天皇の立てた「不改常典」であった。くり返すことになるが、特別の体系をもつ整備された法というのではない。その原形は口授であり、趣旨は明確であるが、その内容は流動する事態そのものであったといつてよい。つまり「不改常典」は、これを受けとり、あるいは利用する者の立場によって、さまざまに変容しうるもの——可変的な存在であったということに留意しておく必要がある。

そのことに関連するものとして、不改常典という呼称の問題があるが、右のような内容をもつ「天智の詔」が最初から「不改常典」と呼ばれたのではないと考える。ただこの表現——詳しくいえば「天地と共に長く、日月と共に遠く、改るまじき常の典と、立て賜ひ、敷き賜へる法」は、大友皇子と五大官が仏前や天皇の前で誓い合つた、その誓約の重みとか、そこにこめた天智の思いを汲めば、まさしく永遠に改むべからざる法でなければならなかつたし、そのことは、この詔——法を利用しようとする者にとっては、なおさらであつたろう。その意味で不改常典は、それ以外には考えられない適切な表現というべきである。

しかしこの呼称は天智やその周辺の当事者の間で使われたものではなく、その後に生れたものと考えられる。じつこの不改常典の語は、持続↓文武の皇位継承において、文武の即位の詔には所見し

ない（同じことを述べた元明即位の詔の(1)には所見するが）ことを重視すれば、その段階では生れておらず、やはり元明即位の詔の段階ではじめて考案されたものであろう。その意味で「天智の詔」は原「不改常典」と呼ぶこともできよう。

こうして、「天智天皇の詔」——原「不改常典」によって皇位継承上の慣例が破られ、大友皇子を奉戴する近江朝が出現したことは、皇位継承の上できわめて重要な意味をもつ。それは、天皇の意志に基づいて定められた後継者は、たとえ年少であつても後見——共治体制をとることで即位出来るといふ、新しい王権授受の形態がつくり出されたことを意味するからである。しかし、これをもって嫡系相承の原理が打ち出されたとはいえない。大友皇子は天智天皇の直系ではあつても嫡系の皇子——嫡妻（倭姫）の所生ではない。

ところで天智天皇が大友皇子への皇位継承を考えるようになった契機は、天智八年（六六九）十月の藤原鎌足の死にあつたとみて、まず間違いない。鎌足が没して一年有余のち、天智十年正月、大友を太政大臣にすえるとともに五大官（左大臣蘇我赤兄・右大臣中臣金・御史大夫蘇我果安・巨勢人・紀大人）を任じているのが、その最初の意思表明であつたと思われるからである。そしてこの措置には皇太弟大海人を抑えるねらいがあつたといつてよい。しかもその年九月に発病し、三ヶ月で死に瀕するという思いがけない事態の急変のなかで、天智に残された最後の課題は、大友への皇位継承と、

その立場の安定化であつた。そのためには何よりも豪族たちの合意が必要であつた。

大友皇子の即位に関連して、いま一つ留意されるのが、皇位継承権を放棄した際にいったという大海人の言葉である。

すなわち『日本書紀』天武即位前紀によれば、死を目前にした天智が皇太弟の大海人呼び、皇位を授けようとしたところ、天智の心を見抜いた大海人は、「願陛下拳^ニ天下^一付^ニ皇后^一、仍立^ニ大友皇子^一、宜^レ爲^ニ儲君^一」と答えたという（天智十年十月十七日条には「請奉^ニ洪業^一、付^ニ厲太后^一、令^ニ大友王^一、奉^ニ宜諸政^上」とある）。つまり大海人の意見は、大友に皇位を譲りたいのなら、まず皇后（倭姫）を即位させ、その上で大友を立太子させたらよい、というもので、大友の皇位継承のためには立太子が必要であり、その実現には女帝の即位（この場合は皇后）が必要であることを指摘したものである。

これはどういう意味かといえば、当然皇太子になり得る立場の皇子が、何らかの理由で立太子出来なかった場合、その母を女帝として即位させた上、立太子を実現したケースが多かったことをいう。倭姫は大友の実母ではないが、形式的ながら母子関係にあったわけで、大海人の指摘は的確であつたといつてよいであらう。むろん天智がこうした慣習を知らなかったはずはない。そこから皇后倭姫が即位もしくは称制したか否かの議論が生ずるところであるが、「天

智の詔」が、先にみたような緊迫した事態の中で発せられたことを考えると、皇后の即位ないし称制が行なわれたとは思えない。むしろ天智は、そうした手続きや慣習といったものを意図的に排除し、一挙に大友即位の実現を図つたと思われる。記録（『古事記』『日本書紀』）には見えないが、大友即位は実現した可能性が高い。

というのも、たとえ大友皇子が立太子し、後継者に定められたとしても、その後大友が即位出来るという保証はなかったからである。大海人皇子の場合、立太子の時期は明確でないが、中大兄皇子（天智）の即位（六六八年）以後のこととすれば、四年来、皇太弟の地位にありながら、その地位を捨てねばならなかったことになる。この時期における皇太子（弟）の地位は、とくに先帝が崩じた場合など、きわめて不安定なものでしかなかったのである。したがって大海人の先の提言は、慣例をふまえた上でのものではあるが、そうした事態を見透かし、天智の弱味を衝いた一矢であつたといつてよい。一方、それを百も承知の天智は、あえて「詔」を五大官に下し、後見という新体制の下で大友への王権授受を実現しようとしたのであつた。天智は最短コースでわが子の即位の実現を図つたわけである。しかしひとたび壬申の乱が起こるや、五大官は分裂し、共治体制の脆弱さを露呈する。天智はそのこともまた、予見していたのではないか。そしてまた、その恐しさをもっとも痛感したのが、天武であり持続であつたはずである。のちに持続が十五歳の孫・文武の即位

を実現するために、みずからが上皇として共治するという、ミウチ的な後見体制を打ち出したのも、そうした先例に学んだ智恵であったに違いない。

ともあれ、即位における年齢問題は、天皇が権威と権力を合わせもつ存在である以上、避けて通れないものであった。

三 不改常典の変容

(1) 元正天皇即位の背景

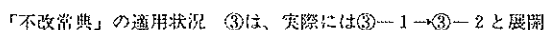
元明即位の詔に所（初）見する不改常典の検討を続けるなかで、それが元明自身の即位のためではなく、文武の嫡孫、首皇子の皇位継承を実現するための拠とされたものであったこと、その論拠が、遡って持統から文武、さらに天智から大友への継承という事実に求められたこと、などを見て来た。年齢が皇位継承上、重要な条件であったことも知った。元明の即位した時、首皇子は七歳、その元明の譲りを受けて氷高内親王（元正天皇）が即位したのも、首皇子が十五歳という年齒幼稚のためであったと見られる。

しかし、元明の即位はともかく、元明譲位Ⅱ元正即位の場合は、首皇子の年齢だけでは片付かない問題があったように思われる。すなわちその一は、元明の即位詔に見られた不改常典の語が、元正即位の詔に出て来ないこと、その二は、元明即位の意図が持統から文

武への継承にならない、孫首皇子の即位実現にあるのなら、珂瑠皇子（文武）と同じ年齢（十五歳）となり、しかもその前年に立太子していた首皇子に譲位し、その即位を実現することが可能であったと思われるのに、実際には元正が即位し、首皇子（聖武）の即位が見送られていること、である。この二つは相互に関連しているが、前者についていえば、元正の即位は元明の即位の意図をそのまま受けついでものであったため、あえて不改常典を打ち出す必要がなかったと考える。むしろ元明の即位が格別異例でなかったように、その譲りを受けた元正の場合も皇位継承の上ではまったく問題はなかった。

問題は後者である。これは、なぜ元明は第二の持統にならなかったのか、というふうにいいかえてもよい。年齢が低いのなら、譲位した元明が即位した首皇子を後見し、共治する体制をとればよい。そしてそれこそが不改常典が持ち出された主旨ではなかったか。まったく同じ条件がととのったのに、なぜ元明はその実現に向わなかったのか。

早急な実現ではなく持久策をとったのは、そうすることで後見者の若返りを図ったものではないか。譲位した時元明はすでに五十五歳だった。この前後、元明には決断が求められていたと見てよい。それは、譲位して首皇子を即位させるとしても、後見のために残された時間は長くはないであろうこと、そうなった場合に起こり得る、



80

(2) 聖武天皇即位の詔

元明天皇即位の詔について「不改常典」の語が所出するのが、聖武天皇即位の詔である。神龜元年（七二四）二月四日に発せられたものであるが、ここには直接関係のある、元正天皇の言葉を引用した部分を掲げておこう。

此食国天下者、掛畏、藤原宮爾、天下所知、美麻斯乃父止坐天皇乃、美麻斯爾賜志、天下之業止、大命乎、聞食恐、美受賜、懼理坐事乎、衆聞食宣、可久賜時爾、美麻斯親王乃、爾乃弱爾、荷重波不堪自加止、所念坐而、皇祖母坐志、掛畏、我皇天皇爾授奉、依此而是平城大宮爾、現御神止坐而、大八嶋國所知而、靈龜元年爾、此乃天日嗣高御座之業食国天下之政、平、朕爾授賜諡賜而、教賜詔賜、都良久、「掛畏、淡海大津宮御宇、倭根子天皇乃、万世爾不改常典止、立賜敷賜爾留隨法」後遂者我子孫、佐太加爾車俱佐加爾、無過事授賜止、負賜詔賜比志、依比、今授賜、年止、所念坐間、爾、……

すなわちこれを要約すると、

(1) この天下は、文武天皇が汝（首皇子）に賜わるはずのものであったこと、

(2) しかしその首皇子が年少のため、重大な任務にたえられないと思ひ、朕（元正）の母元明に授けられたこと、

(3) 靈龜元年、その元明天皇が朕（元正）に讓位した時、最後には、皇位を「不改常典」に従って間違ひなく首皇子に授けるように、と教え命じられたこと、

の三点となろう。元正天皇の詔はこのあと、去年大瑞が表われ、豊年であったのは次の治世のめでたさに対するもので、そこで改元して、皇位を首皇子に授ける、と続くが、つまるところ、その意図は、本来、皇位は文武天皇から首皇子へ授けられるべきものであり(①)、それこそが「不改常典」にかなう行為である(③)、ということを示明する点にあったといつてよい。

首皇子の即位については、これまで述べて来たように、まず元明即位の詔に「不改常典」を持ち出し、その布石としたものの、意図的に膿化されていた。それが元明讓位の詔ではじめて公表され、首皇子への皇位繼承という真意が明らかとなり、さらにここに来て、それは文武天皇から首皇子への皇位繼承という形でなされるものであり、それが不改常典に叶うものであるとして、はじめて法的に正当化されたのであった。いかに慎重に事が運ばれているかが知られよう。

この聖武即位の詔のなかで注目される部分がある。それは、これ

に引用する元明の言葉としてみえるものであるが、首皇子（聖武）

のことを「我子」と呼んでいることである。首皇子は元明の孫（元

正の甥）であつて子ではない。それをあえて我子と呼んでいる背景

には、皇位を文武の嫡子首皇子へ継承するのだという嫡系相承の論

理の、いわば事実をこえる昂揚があつたことを思わせる。これはす

でに述べた通り、幼少の首皇子の皇位継承には、文武の嫡子という

こと以外に切札がなかったからで、すでにその伏線は、元明の即位

の詔で、持統から皇位を譲られた文武が草壁の嫡子であることをこ

とさら強調した時に敷かれていたといつてよい。おそらく元明即位

の詔はここまでを見通した上で組み立てられたものであつたろう。

それにしても首皇子を我子と呼ぶ元明の使命感の強さに驚かされ

るが、それが同じくこの詔にみる、元正に嚴命したという元明の

「教え」に他ならない。

というのは、皇位は実際には、文武↓元明↓元正↓聖武へと継受

されたわけであるが、それを元明は、文武から聖武へと継承される

のだと述べるのである。したがつてこの論法によれば、自身をふく

め、元明・元正の二女帝は、あくまでもその間をつなぐ仲継ぎ天皇

ということになる。元明はそのことをことさら強調し、そうするこ

とで首皇子の即位をなんとしてでも実現せよ、と元正に教えている。

この元明の教命こそが天智の定めた不改常典の論理であり精神に他

ならなかった。

(3) 不改常典の「変容」

さて、これまで天智の詔「不改常典」について、(1)天智↓大友、(2)

持統↓文武、(3)文武↓聖武、という三つの王権授受のケースを中心

に検討して来たが、それぞれの場合で内容が微妙に違っていること

に留意される。すなわち(1)における「天智の詔」が意図したのは、

天智の死後における皇位継承と重臣（五大官）による後見共治であ

つた。それが(2)における元明の詔にみる「不改常典」では、持統の

讓位と後見共治であり、(3)の聖武の詔にみる「不改常典」では、元

明・元正の讓位による嫡系（首皇子）の皇位継承、であつた。

しかしこれらに共通するのは、いずれの場合も、皇子が幼少とい

う不利な立場を克服するための論拠としてもち出されていることで

ある。その先例となつたのが、(1)天智から大友への継承であつたこ

とはいうまでもない。しかし一言しておかねばならないのは、皇位

の継承に関して、「天智の詔」では「讓位」という形態までが考え

られていたわけではなかったし、「嫡系相承」が定められていたと

も思えないことである。前者については、先にもふれたように天智

は生きている間に大友に讓位したのではない。もし讓位が可能なら

ば当然実行していたであらう。しかしそれがなされていないのは、

年少者への継承に踏み出せなかったことを物語っている。つぎに後

者については、大友は天智の長子ではあっても嫡子ではなかったから、天智が嫡系相承を意図していたとは考えがたい。要するに、年少の皇子に、いわば超法規的に皇位を継授する論理として考案されたのが天智の詔であり、つまりは原不改常典であったということだ。

ところが、不改常典を論拠に行われたあと二つの場合、(2)持続↓文武では「讓位」と「共治」という論理が強調され、(3)元明・元正↓聖武では「讓位」に「嫡系相承」の論理がもち込まれている。ここでは共治はもち出されない。不改常典の内容はそれぞれ微妙に違っているところか、実際にはどれひとつ同じではないとさえいえるのである。これは不改常典の内容が変化したのか、それとも、もともと天智の定めた不改常典なるものが虚構の存在であったことによるものであろうか。

私はそのどちらでもないと考える。すでに見て来たように、いわゆる不改常典の母胎は「天智の詔」であり、不改常典は天智に仮託したものである。口勅の類であって体系をもった法の如きものではないが、さりとて実体のない曖昧模糊としたものではない。それどころか、いままでいく度も論じたように、意図や趣旨は明快であった。

「天智の詔」は実体のある法であったから、それ自体が変化、変容することはありえない。変化した（とみえる）のは、それを利用した側の事情による。第一に、当初存在しなかった「不改常典」の呼

称がある時期（元明朝）に生れた。「天智の詔」を「原不改常典」と呼ぶ理由である。第二に、その天智の詔↓原不改常典が用いられただのは年少皇子への皇位継承（持続↓文武、元明・元正↓聖武）の論拠としてであるが、現実のケースに即してこれを用いる場合、当面の問題を克服するのに都合のよい部分を引き出し、援用したのであって、部分的に変化したり肥大したりするのがむしろ当然といべきである。不改常典とはあくまでも用いる側の理念であって、その文字にとらわれ最初から不変不改のものともたところ、従来の不改常典論がしばしば迷路に入り込んだ最大の原因があったといつてよい。明確な規定をもつ法でさえ、運用に当たっては多様な解釈が生じることを思えば、不改常典を固定的にとらえることがすでに間違っているのである。

つぎに不改常典が、元明の言動からもうかがわれるように、首皇子（聖武）の即位に向けて最大限に援用されたことはたしかであるが、だからといって、不改常典は聖武の即位が実現したことで役割を終えたとする理解や、首皇子への皇位継承を正当化する限定された役割のものであったとする見方⁹には直ちに賛成できない。不改常典がそのためにつくられた仮託の法であったというのなら、それが当然の結論であろうが、もともと「天智の詔」として実体をもつものであった以上、むろん消滅することはなかったし、必要とあらばいつでも利用できるものとして存在していた。げんに聖武から孝謙

天皇への譲位にもこの不改常典がもち出されている。

すなわち天平勝宝元年（七四九）七月二日、大極殿に即位した際の孝謙天皇の詔のうちにつきのうに見える。

平城乃宮御宇之天皇乃詔之、掛畏近江大津乃宮御宇之天皇乃、不改、自常典、等、初賜比定賜都流法、隨、斯天日嗣高御座乃業者、御命爾坐世、伊夜嗣爾奈賀御命聞看止、勅天御命乎畏自物受賜理坐天、食国天下乎惠賜比治賜希間爾、万機密久多久志天、御身不敢賜有礼、隨、法、天日嗣高御座乃業者、朕子王爾授賜止勅天皇御命乎、親王等王臣等百官人等、天下乃公民衆聞食宣。

これは聖武天皇の言葉を用いたものであるが、例によって要約すると、

(1)（聖武は）、天智天皇の定めた「不改常典」に従って皇位を受けよ、という平城宮御宇天皇（これは元正天皇とも元明天皇とも解せる）の命を承って即位し、天下を治めてきた。

(2) しかしその間、体力も衰え政務にたえられなくなってきたので、いまそれを「法のまにまに」朕の子（孝謙）に授けようと思う。ということになる。ところがこの詔では、(1)で聖武の即位が不改常典に従うものであったとしながら、(2)では、孝謙への譲位について、「隨法」（法のまにまに）とあるだけで不改常典の文字が見えない。

そこから、この「法」と「不改常典」との関連を否定する見方が多い。しかし「法のまにまに」授けられた孝謙への譲位は、文脈上そ

の前文の「近江大津宮に御宇し天皇の不改常典と初め賜ひ定め賜へる法のまにまに」与えられた文武から聖武への譲位と同じ論拠にもとづくものとみるべきで、孝謙への譲位もまた聖武が不改常典に従って行なった行為と解して間違いはない。これとは別に、光明皇太后の言葉として所見するものであるが、「阿宮御宇天皇（草壁皇子）の日繼はかくて絶えなむとす、女子の繼にはあれども、繼がしめむ」（天平宝字六年六月三日）と孝謙の即位が求められたのも、そうしたことを物語る。

孝謙が即位したのは三十二歳であるが、ただ孝謙の場合、不改常典が持ち出されたこれまでの状況に比べると、年齢においてはむしろ、聖武の嫡子という点でも全く問題はなく、ことさらに不改常典を強調する理由も必要もなかったのである。不改常典はあくまでもこれを利用するものの立場において変容するものであったことを、あらためて銘記すべきである。

それにしても不改常典の必要度が低くなって来たことはたしかであった。

四 譲位と皇太子制度

(1) 平安期の不改常典

これまで元明天皇即位詔にはじめて現われた不改常典について述

べてきたが、この不改常典は平安期に入ると、桓武・淳和・仁明・文徳・清和・陽成・光孝の各天皇（ないのは平城・嵯峨の二人）、いってみれば殆んどの天皇の即位詔に登場し、定型化する。奈良期の不改常典が、特定の天皇に関わって出てきたのと異なる点であるが、こうした変化が、当時の王権継承の在り方と無関係であったとは思えない。そこでこの章では、平安期の不改常典を手がかりに王権の推移を考えてみたい。

次に掲げるのは『続日本紀』天応元年四月十五日条にみえる桓武天皇即位の詔のうち、不改常典に関係する部分である。

挂畏現神坐倭根子天皇我皇此天日嗣高座之業^平掛畏近江大津乃宮^乎御宇之天皇乃初賜^比定賜^部流法随^尔被賜^三仕奉止仰賜^比授賜。

改めて要約するまでもないが、主旨は、私（桓武）の皇位は、天智天皇が定めた法に従って承わり仕えまつれ、とて光仁天皇から授けられたものである、ということである。ここには元明即位詔に記された「不改常典」の語はみえないが、通説の通り、「不改常典」と同様の使い方がなされたものとみてよいであろう。そして平安期の天皇即位詔にみえる不改常典は、殆んどこれと同文である。桓武の詔が手本とされたものであろうことは間違いないく、平安期に入って不改常典はさらに変容したことを示している。奈良期の不改常典が、事実上は譲位の詔の中でみられたのに対して、この時期になる

と即位の言葉として用いられているのも変化の指標となる。

変化といえは平安期の不改常典は、仁明↓文徳↓清和、光孝↓宇多というように、譲位の有無にかかわらず用いられること、また嵯峨↓淳和↓仁明、陽成↓光孝というように、嫡系でないことはもとより、直系でもない皇位継承においても用いられているのも特徴である。とくに後者の事実が、「不改常典」を嫡系もしくは直系相承に関する法と理解する意見の弱点となっていた。しかしこれまで綴述してきたように、原不改常典は天智天皇が全く前例のない形で大友皇子に皇位を授けたという性質上、そのなから直系相承の論理を汲み取ることも出来たし、皇位継承に関する一般的な法として拡大解釈することも可能であった。嫡系とか直系の相承法と限定する方が、正確ではなかったわけである。しかしだからといって、内容が曖昧であったからいかようにも利用出来た、といった類のものではない。天智の詔の内容、つまり大友皇子への皇位継承という事実そのものは明確であった。

そのように考えれば、一見混乱したようにみえる平安期のそれは、不改常典が最大限に拡大適用されたものであり、つまりは形骸化したことによる現象に他ならない。

光仁天皇のあとを受けた桓武天皇は、即位三年後から造都事業に着手し、長岡京ついで平安京に遷都するが、これは新たに天智系皇統の都づくりが最大の課題であったからである。天智系皇統の意識

表1

(六国史・日本紀略・類聚國史による)

皇太子	春宮大夫	(位階)	(就任・所見年月日)	春宮亮	(位階)	(就任・所見年月日)	
(文武) 珂瑠	路跡見	直広参	持統一一(六九七)二・二八任	巨勢粟持	直大肆	持統一一(六九七)二・二八任	
(聖武) 首				〔東宮少属 朝妻金作大藏〕		養老四(七二〇)二・二二所見	
(孝謙) 阿倍	巨勢奈氏麻呂 下道真備 石川年足 吉備真備	從四下 從四下 從四下 從四下	天平一一(七三九)四・二一所見 天平一三(七四一)七・三所見 天平一五(七四三)六・三〇任 天平一九(七四七)三・一一任 天平一九(七四七)一一・四所見	背奈福信 石川年足	正五下 正五下	天平一五(七四三)六・三〇任 天平一八(七四六)九・二〇任	員外亮
(淳仁) 大炊	佐伯毛人	從四下	天平宝字元(七五七)七・九所見				
他戸	藤原藏下麿	從三	宝龜二(七七二)正・二三任	兵部卿	從四下 從五上	宝龜二(七七二)正・二三任 宝龜二(七七二)正・二三任	右中弁 員外亮
(桓武) 山部	藤原是公	正四下	宝龜五(七七四)三・五所見	左衛土督・式部大輔	從五下 從五上	宝龜七(七七六)三・六任 宝龜七(七七六)三・二四任 宝龜九(七七八)二・二三任	丹波守
早良	大伴家持 〃	從四上	天応元(七八一)四・一四任 延暦元(七八二)五・一七任	參議 右京大夫	從五下	天応元(七八一)四・一四任	
(平城) 安殿	紀古佐美 藤原葛野麻呂 藤原縄主	從四上 從四下 從四下	延暦四(七八五)一一・二五任 延暦一六(七九七)二・九任 延暦一八(七九九)四・一一任	中衛中將・式部大輔	從五上 正五下 從五上 從五下 從五上 從五下 從五上 從五下	延暦四(七八五)一一・二五任 延暦九(七九〇)七・二四任 延暦一三(七九四)二任 延暦一六(七九七)二・一五任 延暦一八(七九九)七・一五任 延暦二三(八〇四)二・一八任	〔公卿補任〕

貞明 (陽成)	惟仁 (清和)	道康 (文徳)	恒貞	正良 (仁明)	大伴 (淳和)	高岳	賀美野 (嵯峨)
南淵年名	藤原良相 平高棟	安倍安仁	文室秋津	良峯安世 藤原愛堯 藤原吉野	多治比今麻呂 藤原三守 良峯安世	藤原藤嗣	藤原葛野麻呂 秋篠安人 安倍兄雄 巨勢野足
正四下	正四下 從三	從四下	從四下	正三 從四下 從四下	從四上 從四下 從四下 從三	從四上	從三 從四上 正四下 從四上
貞観一一(八六九)二・一任	嘉祥三(八五〇)一一・二五任 齊衡元(八五四)八・二八任	承和九(八四二)八・四任	天長一〇(八三三)二・三〇任	天長五(八二八)所見 天長五(八二八)閏三・九任 天長七(八三〇)五・五任	弘仁二(八一〇)一・一一任 大同五(八一〇)九・一一任 弘仁九(八一八) 弘仁一三(八二二)三・二〇任	大同四(八〇九)四・一四任	大同元(八〇六)二・一六任 大同元(八〇六)五・一九任 大同三(八〇八)一〇・一九所見 大同三(八〇八)一一・四任
				『公卿補任』 『公卿補任』	『公卿補任』	兵部大輔・参議	参議・式部卿 参議
藤原門宗	藤原興邦 南淵年名 南淵年名	藤原良仁	藤原貞守	藤原良房 藤原助	藤原三守 清原夏野 藤原常嗣	小野峯守	藤原冬嗣
從五下	從五下 從五下 從五下 從五下	從五下	從五上	從五下 從五下	從五下 從四下 從五下	從四下	從五下
貞観一一(八六九)二・一任	嘉祥三(八五〇)一一・二五任 齊衡元(八五四)八・二八任 齊衡元(八五四)一〇・二二任 天安元(八五七)九・一〇任 天安二(八五八)三・一三任	承和九(八四二)八・四任 承和一五(八四八)二・一四任 嘉祥二(八四九)二・二七任	天長一〇(八三三)二・三〇任	天長七(八三〇)五任 天長八(八三一)六・七任	弘仁元(八一〇)九任 弘仁二(八一〇)一〇・一一任 弘仁一四(八二三)四・一八任	大同四(八〇九)四・一四任	大同二(八〇七)五・二三任
	権亮			大学頭 『公卿補任』	『公卿補任』 『公卿補任』		『公卿補任』

表
2

[illegible]

はこの桓武により強調されたといつてよいが、そうした桓武にとって、天智の定めた「法」『不改常典に従って即位することは、みずからを権威づける上で恰好のものであったろう。と同時に桓武はそうすることで、天皇としての心構えを天智天皇に求めたのであろう。そして以後、平安京が都として固定するに従い、以後の天皇は桓武の例にならない、即位の詔のなかに不改常典を引き合いに出すことが慣例化したようだ。もっとも桓武のあと、平城・嵯峨天皇の詔には不改常典が所見しないが、これは、鴨長明が『方丈記』のなかで指摘するように、平安京が都として定まったのが、薬子の変を経た嵯峨天皇の時であったということと無関係ではないだろう。そうした時期を経て、桓武を通して天智につらなるといふ意識も芽生えたの

恒貞	藤原三守源常	從二 正三	天長一〇(八三三)三・一任 承和七(八四〇)八・二二任		小野 篁	從四下 從五上	天長一〇(八三三)三・一三任 天長一〇(八三三)三・一三任 承和八(八四二)二・六任 承和九(八四二)八・四任 承和一四(八四七)五・一四任	
(前和) 惟仁	源 信	正三	嘉祥三(八五〇)一・二五任		菅原是善 豐階安人	從五下 從五上	嘉祥二(八四九)正・一三所見 嘉祥二(八四九)二・二七任	
(陽成) 貞明	藤原氏宗 源 融	正三	貞観一一(八六九)二・一任 貞観一五(八七三)正・一三任		大枝智人 豐階安人	從五下	嘉祥三(八五〇)一・二五任 天安二(八五八)三・一八任	大内記
					橘 広相	從五下	貞観一一(八六九)二・一任	

ではなからうか。

(2) 皇太子制度の成立

それはともかく、平安期に入りこのように不改常典が実質的な意味をもたなくなった要因は何であろうか。私はそのことに王位継承における新しい装置として皇太子制度が整備されたことと無関係ではないと考える。

あらためて述べるまでもなく、天智天皇以来、皇太子は存在するものの、皇位継承の在り方、いわば王権は決して安定していたわけではなかった。立太子されながら、前帝の没後、皇位をめぐる紛争がたえなかったのもそのためである。これは当時の皇太子に、皇

表
3

		即位→立太子ま での期間 (年)	立太子期間
神 武	(即) 神武元 (前660) 正・1	41	38
綏 靖	(立) 神武42 (前619) 正・2		
安 寧	(即) 綏靖元 (前581) 正・8	24	8
	(立) 綏靖25 (前557) 正・7		
懿 德	(即) 綏靖33 (前549) 7・3	11	28
	(立) 安寧11 (前538) 正・1		
孝 昭	(即) 懿德元 (前510) 2・4	21	14
	(立) 懿德22 (前489) 2・12		
孝 安	(即) 孝昭元 (前475) 正・9	67	16
	(立) 孝昭68 (前408) 正・14		
孝 靈	(即) 孝安元 (前392) 正・7	5	27
	(立) 孝安76 (前317) 正・5		
孝 元	(即) 孝靈元 (前290) 正・12	5	41
	(立) 孝靈36 (前255) 正・1		
開 化	(即) 孝元元 (前214) 正・14	1	35
	(立) 孝元22 (前193) 正・14		
崇 神	(即) 孝元57 (前158) 11・12	28	33
	(立) 開化28 (前130) 正・5		
垂 仁	(即) 崇神元 (前97) 正・13	47	21
	(立) 崇神48 (前50) 4・19		
景 行	(即) 垂仁元 (前29) 正・2	37	63
	(立) 垂仁37 (8) 正・1		
成 務	(即) 景行元 (71) 7・11	50	10
	(立) 景行51 (121) 8・4		
仲 哀	(即) 成務元 (131) 正・5	47	14
	(立) 成務48 (178) 3・1		
応 神	(即) 仲哀元 (192) 正・11	11	67
	(立) 神功3 (203) 正・3		
仁 德	(即) 応神元 (270) 正・1	30	57
	(立) 仁德1 (313) 正・3		
履 中	(立) 仁德31 (343) 正・15	1	5
	(即) 履中元 (400) 2・1		
反 正	(立) 履中2 (401) 正・4	22	2
	(即) 反正元 (406) 正・2		
允 恭	(即) 允恭元 (412) 12	6	6
	(立) 允恭42 (453) 12・14		
安 康	(即) 允恭42 (453) 12・14	22	4
	(立) 雄略22 (478) 正・1		
雄 略	(即) 安康3 (456) 11・13	6	4
	(立) 雄略22 (478) 正・1		
清 寧	(即) 清寧元 (480) 正・15	6	4
	(立) 清寧元 (480) 正・15		
顕 宗	(即) 清寧元 (480) 正・15	6	4
	(立) 顕宗元 (485) 正・1		
仁 賢	(立) 清寧3 (482) 4・7	6	4
	(即) 仁賢元 (488) 正・5		
武 烈	(立) 仁賢7 (494) 正・3	6	4
	(即) 仁賢11 (498) 12		

繼 体	(即) 繼体元 (507) 2・4]	6	18
安 閑	(立) 繼体 7 (513) 12・8			
	(即) 繼体25 (531) 2・7			
宣 化	(即) 乙卯 (535) 12]	15	18
欽 明	(即) 宣化 4 (539) 12・5			
敏 達	(立) 欽明15 (554) 正・7			
	(即) 敏達元 (572) 4・3]		
用 明	(即) 敏達14 (585) 9・5			
崇 峻	(即) 用明 2 (587) 8・2			
推 古	(即) 崇峻 5 (592) 12・8]		
舒 明	(即) 舒明元 (629) 正・4			
皇 極	(即) 皇極元 (642) 正・15			
孝 德	(即) 大化元 (645) 6・14]		
齊 明	(即) 齊明元 (655) 正・3			
天 智	(立) 大化元 (645) 6・14			
弘 文]	8	5
天 武	(立) 天智 7 (668) 2・23			
	(即) 天武元 (672) 2・27			
(草壁皇子)	天武10 (681) 2・25]	10	0
持 統	(立太子せず)			
	(即) 朱鳥元 (687) 9・9			
文 武	(立) 持統11 (697) 2・16]	7	10
	(即) 文武元 (697) 8・1			
元 明	(立太子せず)			
	(即) 慶雲 4 (707) 7・17]	3	0
元 正	(立太子せず)			
	(即) 和銅8 (715) 9・2			
聖 武	(立) 和銅 7 (714) 6]	7	11
	(即) 養老 8 (724) 2・4			
(基王)	神亀 4 (727) 11・2			
	神亀 4 (727) 9 天逝]	1	1
孝 謙	(立) 天平10 (738) 正・13			
	(即) 天平感宝元 (749) 7・2			
(道祖王)	天平勝宝 8 (756) 5・2]	0	8
	天平宝字元(757) 3・29 廃太子			
淳 仁	(立) 天平宝字元 (757) 4・4			
	(即) 天平宝字 2 (758) 8・1]	1	0
称 徳	(立太子せず)			
	(即) 天平宝字 8 (764) 10・9			
光 仁	(立) 神護景雲 4 (770) 8・4]	1	1
	(即) 神護景雲 4 (770) 10・1			
(他戸親王)	宝亀 2 (771) 正・23			
	宝亀 3 (772) 5・27 廃太子]	0	8
桓 武	(立) 宝亀 4 (773) 正・2			
	(即) 天応元 (781) 4・3			
(早良親王)	天応元 (781) 4・4]	0	

	延暦4 (785) 9・28 廃太子			4
平 城	(立) 延暦4 (785) 11・25			21
	(即) 延暦25 (806) 3・17]	0	3
嵯 峨	(立) 大同元 (806) 5・19			
	(即) 大同4 (809) 4・13]	0	1
	大同4 (809) 4・14			
(恒岳親王)	弘仁元 (810) 9・13 廃太子]	0	13
淳 和	(立) 弘仁元 (810) 9・13			
	(即) 弘仁14 (823) 4・16]	0	10
仁 明	(立) 弘仁14 (823) 4・18			
	(即) 天長10 (833) 2・28]	0	9
	天長10 (833) 2・30			
(恒貞親王)	承和9 (842) 7・17 廃太子]	0	8
文 徳	(立) 承和9 (842) 8・4			
	(即) 嘉祥3 (850) 3・21]	0	8
清 和	(立) 嘉祥3 (850) 11・25			
	(即) 天安2 (858) 8・27]	11	7
陽 成	(立) 貞観11 (869) 2・1			
	(即) 貞観18 (876) 11・29]	8	0
光 孝	(立太子せず)			
	(即) 元慶8 (884) 2・5]	3	0
宇 多	(立) 仁和3 (887) 8・26			
	(即) 仁和3 (887) 8・26			

表4 聖武天皇の近侍者

越智広江	刀利宣令	塩屋古麻呂	土師百村	大宅兼麻呂	染浪河内	船大魚	山口田主	紀清人	朝来賀須夜	山上憶良	山田御方	日下部老	紀男人	伊部王	佐為王
正六上	從七下	從七下	正七上	從六下	正六下	正六上	正六上	從五下	從五下	從五下	從五上	正五上	正五上	從五下	從五上
明経第一博士		明法道師範、律令撰定			文章道師範		算道師範	圀史撰集			文章道師範				風流侍從

位継承者としての資格が必ずしも保証されていたわけではないからで、むしろ皇太子は天皇の補佐として（場合によっては天皇に代つて）国政に参与する立場であつたと考えられる。中大兄皇子が長く皇太子の地位にあつたのも、それである。こうした皇権の不安定さから生まれたのが、これまでみてきた「天智天皇の詔」――不常典だつたわけである。してみれば皇位継承者としての皇太子の立場が制度的に確立された時、「天智の詔」――不常典は事実上、無用のものとなり、使命を終えたといえよう。

その時期はいつか。

皇太子制における第一の画期は、持統朝における文武の立太子、すなわち不常典がもち出された時である。

それまでの皇太子は少なくとも数年間は皇太子でいる時期があるのに対して（九〇頁、表3参照、珂瑠皇子（のちの文武）は立太子半年後に即位している。これは明らかに次期皇位継承者の意味をもつ立太子である。八年間皇太子の地位にありながら即位出来なかつた草壁皇子の反省から、持統はこの文武を確実に即位させるため、立太子の半年後に譲位したのであつた。この意味では、皇位継承者としての皇太子の誕生は、譲位の制と表裏一体の形で実現されたいえる。

ちなみに皇太子の家政機関である東宮坊については、持統十一年（六九七）二月、この珂瑠皇子の立太子とともに職員――東宮大夫・春

宮亮や東宮傅が任命されたのが初見であるから、やはり文武立太子を契機に東宮機関が整えられはじめたとみてよい。それが文武朝以降、令に規定されたのである。もっとも半年間でしかなかったから、こうした機関がどの程度機能したかは疑わしいが、これを機に皇太子は皇位継承者として変質しはじめたことは確かな事実であつた。神亀四年（七二七）、聖武の嫡子基王が生後二ヶ月で立太子されてゐるのは、その典型といえよう。

もっとも文武の次に立太子した首皇子の皇太子時代には、坊官としては文献の上には少属と舍人しかみられない。首皇子の場合、皇太子期間が十年にも及んでおり、もっと多くの坊官がいてしかるべきものに思えるが、あながち史料上の制約とのみいい切れない面がある。

そのことに關して注目されるのが、藤原武智麻呂が首皇子の東宮傅に任じられていること（『武智麻呂伝』）と、とくに養老五年（七二二）正月、佐為王・山上憶良など十六人の中・下級官人が、退朝の後、東宮（首皇子）に近侍するよう命じられていることである。「退朝之後」の供奉であるから、当然その立場は私的なもので、いわば「近臣」の配属とみてよいが、この十六名の顔ぶれをみると（九二頁、表4参照）、特殊な知識や技能を有する者たちであつて、おそらく当時、各界ですぐれた才能をもつ人物がえらばれ、帝王教育の任に当てられたものと考えられる。こうした人撰が、のちの東

宮学士の制につらなることはいうまでもない。ただしこのような人々の任命が首皇子の立太子から七年もたった時点でなされているところに、当時なお、東宮坊の組織が十分にとのつていなかったことを思わせる。逆にいえば、未熟であったからこそこのような独自の人事を行なうこともできたわけで、武智麻呂のようなプレーンの配置とともに、皇太子首皇子の東宮坊を特色あるものにした理由であった。

その点からすると、東宮坊・東宮学士がより整備された形でおかれたのは阿倍内親王の時である。しかし周知の通りこの内親王は、孝謙女帝として即位して以後、聖武の遺言によって立太子した道祖王は一年足らずで廃太子、次の大炊王も立太子後一年余で即位したもの、すぐに廃帝、そのあと重祚した称徳は皇太子を定めないまま崩御する、といったわけで、決して制度的に確立したといえる状況ではなかった。この間、皇太子の空位の期間も多い。「國乃鎮止方、皇太子置定^{ハヒササミコヲオササメマシメテ}天^{アマ}之^ノ心^{ココロモ}安^{ヤス}々^ク於^{コノ}多^タ比^ヒ仁^ニ在^ニ」(『続日本紀』天平宝字八年十月十四日条)とされながらも、なお慣例化していなかったことの表われであり、東宮機関も実質的に機能していたとはいえない。それはともかく、こうした意味での皇太子制度の確立は、老齢でありながら立太子した上、二ヶ月後に即位した光仁天皇にはじまり、同じ光仁朝の他戸・山部の時をもって定まったといえるように思う。皇太子制度における第二の画期であり、確立期であった。

そのことを端的に示すのが、これまでの立太子は、天皇の即位後、少なくとも数年後に行われるのが普通であったが、表3にみるように、これ以後は天皇即位儀礼の一環として、ほぼ同時期に行われるようになり、あわせて坊官・東宮学士の任命も行われたことである。また光仁以後、皇太子の空位の状態も殆んどなくなる。そして立太子の詔に「随^レ法(法のまにまに)」という表記(『続日本紀』宝龜二年正月二十三日、天應元年四月四日条など)がなされるようになる。

これは不改常典の趣旨が、制度化された立太子のそれへと引きつがれたと理解することも可能であろう。しかしこのような皇太子制度の整備、すなわち皇位継承制度の確立は、それと引き換えに皇太子のもっていた執政権をも吸収し、皇太子はたんに次期皇位継承者として存在するだけとなる。そうであることが、もっとも安定的な皇位継承の姿であったからであり、皇太子制度の論理的帰結であった。不改常典を論じてきた本稿も、それが譲位や皇太子制度に吸収されたことを確認したところで、終える時期にきたようだ。

繰り返すことになるが、不改常典は虚構ではなく実在したものであった。したがって不改常典そのものは消滅したのではない。消滅したのはそれを利用する政治的要件・状況の方である。元明・元正天皇のような、王権継受の方便として立てられた女帝の時代が終わったのも、同様の意味からである。

ただし不改常典に関連して是非述べておかねばならないのは、こ

れが最高度に用いられたのが文武から聖武への皇位継承の場面であり、そこで嫡系相承の論理が強調されたことは確かであるが、そのことからわが国の皇位継承は、この時期から嫡系相承の方式をとるようになったとみるのは決して正しい認識ではないということである。げんに平安時代においても嫡系相承はおろか、直系相承すら行われていないことがあり、むしろ無原則といってよいかも知れない。広い意味で皇胤であることはいうまでもないが、必ずしも血脈の論理がとられてはいないのである。讓位と皇太子制度は、皇位継承を安定化はしたが、受け皿の形成は血脈の論理をむしろ希薄にする方向で作用したというのが私の理解である。

ともあれ皇太子制度の確立、讓位の慣例化は、不改常典を必要とした年齢の制約から即位を自由にした。平安時代に入り、年少の幼年天皇が出現しはじめるのが、そのことを如実に物語っている。そして天皇の即位年齢の低下は、天皇のもつ権威と権力の低下と両者の分化をもたらしした。ミウチ関係をテコに、その権力の部分を掌握するのが摂関家であり、長い雌伏ののち、天皇家の家父長として登場する上皇（院）であったことはいうまでもない。

してみると不改常典は、日本の王権＝天皇（制）における権威と権力の分化、換言すれば執政から不執政へ移行する間に機能した王権継受の法であったということになろう。

注

- (1) 丸谷才一『後鳥羽院』（日本詩人選、筑摩書房、一九七三年）。
- (2) 網野善彦『異形の王権』（平凡社、一九八六年）。
- (3) 不改常典論については田村円澄『不改常典について』（『飛鳥仏教史研究』一九六九年）、水野柳太郎『不改常典をめぐる試論―大王と天皇―』（『日本史研究』150・151合併号、一九七五年）、武田佐和子『不改常典について』（『日本歴史』399、一九七四年）などが先行学説をくわしく整理している。
- (4) 管見では長山泰孝『不改常典の再検討』（『日本歴史』446、一九八五年）が、不改常典を元明即位の根拠とみない、わずかの論考であろう。
- (5) 岸俊男『光明立后の史的意義』（『日本古代政治史研究』一九六六年）。
- (6) 北山茂夫『壬申の乱の若干の追記』（『日本古代政治史の研究』一九五九年）。
- (7) 長山泰孝、前掲論文。
- (8) 瀧浪貞子『武智麻呂政権の成立―『内臣』房前論の再検討―』（『古代文化』37・10、一九八五年）。
- (9) 武田・長山、前掲論文。
- (10) 伊野部重一郎『不改常典小考』（『続日本紀研究』192、一九七七年）。
- (11) この十六名については瀧浪貞子『奈良時代の上皇と『後院』』（『史窓』39、一九八二年）が具体的に分析している。